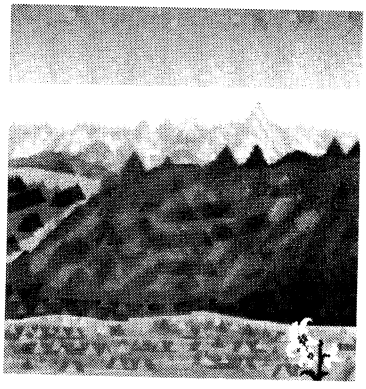
# 大糸線 車窓より

ゆきなか　すみお



青空にくっきりと白い稜線をえがいている常念岳。有明と餓鬼岳の奥に燕がわずかに見えている。前山は黒々と緑におおわれて豊かな水を安曇野にひろげている。

昭和二十年四月。ただ一日の帰宅を許された青年がこの駅におり立った。

翌朝いそぎ足で駅に向かっていた青年はふっと立ちどまると残雪のアルプスをふりかえって三度「さようならあ！」、大声で叫んで一散に走っていった。

列車のいれかわりを待つあいだ大糸線有明駅からその山を眺めている。青年が二度と見ることのなかったその山を。

「国のためなんかじゃない、父や母、大切な人のためにいくんだ。僕は靖国へはいかないよ、兄はそう言いましてね。あの頃そんなこと人に聞かれたら大変なことになりますし、母も私もびっくりしたんですよ」。別れの日をはなされる妹御も、静かに老いられた。

列車が動きだした。わあわあ騒いでいる地元の高校生たちにまじって常念岳をおいかけている。今朝宿の新聞は横須賀、呉、佐世保から自衛艦が出航したことを報じていた。武器を持って、戦場へ。お茶をいれてくれたおばあちゃんのつぶやき、またあ、若いもんが死ぬようなことにならにゃあいいがなあー

ゴトン、ゴトン、ゴトン、ゴトン、揺られて右へ左へよろけて、段々遠ざかっていく山をなおも見つめている。

自由をいっさい許さない軍国を批判しながら、有明出身の慶応大学生が一人、沖縄の米艦艇に突入、戦死した。昭和二十年五月十一日、敗戦まであと三ヵ月と四日。二十二才。

（ゆきなか・すみお　詩人）